

巻頭言

Transition : 人々の生活・人生における新しい道程の中で私の人生、 そして私の作業はどのように展開していくのだろうか。楽しみにしよう。 移行と作業 パート 2

小田原 悦子

聖隷クリストファー大学

今年作業科学セミナーは21回目を迎えました。私が作業科学に出会ったのは、佐藤剛先生が1995年に札幌で開催された第1回OSセミナーに参加して、Dr. Florence ClarkとDr. Ruth Zemkeにお会いし、南カリフォルニア大学に留学してからだから、22年になる。私の人生の3分の1以上を作業科学と伴走している感じである。

その間に、日本作業科学研究会との関係で一番印象深いことは何だったか、と問われれば、2015年に浜松の仲間たちと担当した第19回作業科学セミナーの開催と答えない。2日間のスケジュールが、一分刻みで遂行されていく様子をハラハラしながら確認しては、胸をなでおろした経験は、私の人生の中でも3指に入るスリルだった。一年以上前から持てる限りのエネルギーと注意を集中し、想像力をフル回転して計画を進め、立ち止まっては積み上げたこととこれからやるべきこと、やりたいこと、そして自分と仲間たちができることを、頭の中で繰り返しシミュレーションし、実行に移す。そんな挑戦を繰り返した。山積みだった問題が片付き、責任を果たしたときに心底安心した。スキルを獲得したことに自分たちの成長を実感した。大きな充実感だった。ずいぶん時間が経って始めてストレスから解放されて「私たちは楽しかった」と実感した。

さて、このOSセミナーのテーマを「Transition : 人々の生活・人生における移行と作業」とした。我々は誕生して、幼児期、成人期、高齢期と順を追って人生の道程（ライフサイクル）を移行するが、その移行と作業に私は興味があった。文化人類学者のvan Genneepは、移行の社会的な性質について興味深いことを述べている。移行に差し掛かった人は社会的に一度死んで、変身する。必要な活動に関わりスキルを磨いて社会に帰り、これまでとは異なる位置について、役割を持ち、社会に参加するというのだ。

私は、臨床家、そして、研究者として高齢期の人たちの移行を見て来た。見慣れていたはずなのに、外から見ているのと、移行の中にいるのとでは、どうも様子が違うようだ。というのは、最近、自分がそのような時期にあると気付かされてとまどうことがある。立て続けに電車の中で席を譲られたときの感じ方は若いときに予想していたのとは違う。若いときには、感謝を予想していた。今の私はちょっと困っている。もう一つの移行である退職も向こうからやってくる。私は仕事場から退く気はなかった。そんなに弱っても、ぼけてもいないのに、私の年齢を理由に仕事環境が変化し、私の日常の作業はそれに反応して変わっていく。作業科学セミナーを担当したときに役割期待にこたえるために環境に挑戦したのとは社会との関係が異なる感じである。外から見ているときは、高齢者は淡々と受け入れて移行していくのかと見ていたが、中にいると、なんだか引かかる自分があるのだ。でも、前と同じようにずっと挑み続けるのも違うと思う。ちょっとトンネルに入ったような感じだ。そういえば、van Genneepは、移行にかかった人は社会から離れると述べている。人里離れたところで、変身して新しい自分になるために修行をするのだ。以前とは違う私になるために、新しい作業的存在への移行のトンネルの中にいるのだ。新しい道程の中で私の人生、そして私の作業はどのように展開していくのだろうか。楽しみにしよう。